

先端統合デザイン特論 II

授業科目名	先端統合デザイン特論 II	単位数 2 単位
英語標記	Progressive Inclusive Design II	
授業コード	360208	
受講人数	50 人	
担当教員	川崎 和男	
対象	全研究科大学院生、全学部学生、社会人（10 名程度）	
開講時間等	第 2 学期＝木曜 4 限（10 月 1 日～）	
開講場所	吹田キャンパス：工学部 M4-101 講義室	
キーワード	デザイン、デザインマネジメント、デザインディレクション	
授業の目的	ディレクター、デザイナーに必要な能力は、デザイン提案能力・デザインマネジメント能力・デザインディレクション能力である。 そのために、高度なデザイン力・マネジメント力・ディレクション力をもった人材の育成を目指した専門教育の授業で行う。それはいわゆるデザインスキルやデザインロジックだけに特化した専門教育ではなく、「モノづくり」や「工学」や「デザイン」が本来向き合うべき、「いのち」をとらえ、尊敬される日本の産業を構築して行くための授業である。 デザインから新しい創造ができる人材、デザインの観点からマネージメントできる人材のために、デザインを中心に全ての技術を結びつけ、デザインにより問題発見・問題解決を行うため、基本的かつ総合的な先端的なデザインの講義・演習を行う。	
講義内容	10 月 7 日-ガイドンス、課題発表 10 月 14 日-製品設計特論 10 月 21 日-プロダクトデザイン特論 10 月 28 日-課題中間発表 11 月 11 日-商品企画特論 11 月 18 日-産業デザイン特論 11 月 25 日-色彩学特論 12 月 2 日-文化デザイン特論 12 月 9 日-インダストリアルデザイン史 12 月 16 日-課題案チェック、実習 1 月 6 日-課題中間発表 1 月 13 日-プレゼンテーション手法論 1 月 20 日-課題製作 1 月 27 日-課題製作 2 月 10 日-プレゼンテーション	
教科書	特になし。http://www.design.frc.eng.osaka-u.ac.jp/を参照のこと	
参考書	特になし。http://www.design.frc.eng.osaka-u.ac.jp/を参照のこと	
成績評価	適宜指示される課題及びレポート	

プログレッシブ・インクルーシブ・デザイン

デザイン理工学の手法性と定義性は、その研究プロジェクトと研究テーマによって 4 つの結論を生み出した。先端性・学際性・融合性・総合性にデザインの核心がある。つまり、帰納的、弁証的に、デザインの上位概念を決定づけていき、その上位概念によって、プログレッシブインクルーシブデザインを誘発した。デザイン理工学により、再構築された「情報」「計画」「設計」「編集」というデザイン手法を、Progressively inclusive Design という概念のもと、新たなデザイン学研究として、デザイン理工学・デザイン工医学・デザイン文理学・デザイン政経学により、これからのデザイン美学を創出する。

デザイン理工学

科学と技術を背景に、「設計学」と「情報学」を基盤としたデザイン手法の導入を目的とする。デザインによって学際的に、新たなデザイン理工学領域を構築を計る。デザイン対象は、理学的に科学を考察し、工学的な技術を先端的かつ領域的に統合し、かつ統一的なコンセプトによる人工物設計である。その具体的な人工物には、モノの形式化と内実的な実装設計によって、デザイン技法の革新化により美学的な造形を計る。つまり、これまでの工学領域を理学的に拡大しながら、さらに、デザインによって焦点を明確にすることで、デザイン思想とデザイン意図をより科学的に統一化できうる学識と実務学の進化を目指していくことになる。この学識は、これまでの理工学領域を、デザインという実務的かつ美学的手続きを導入することで、より先端性を獲得することができる。

デザイン工医学

医学と工学の連携は、デザイン思想とデザイン手法によって、初めて統合化される。単なるブームである医工連携では、その具現化は机上の論理に終わることは明らかだ。そこで、医学は、さらに薬学・歯学・看護学・栄養学・健康科学を包括した学識と再定義する。そして工学的なアプローチによる医学領域に対しての技術投機には、これまでの医療環境・医療技術・医療情報・医療制度に対して、工学的な解決をデザインによって強化支援することが新たな医工連携の手法論である。そこで、デザインにとっても、医学的領域への学識と見識と良識を再確認しなければならない。また、工学はデザイン理工学的な発想と具現化システムによって再構築されることで、医学への対応が可能になる。

デザイン文理学

デザインに対して、整理された文理学という背景を準備する。これは学識としての包括的かつ統合的な「情報学」と「編集学」を基盤としたコミュニケーションのための論理性と具体性を明快するものである。基本的には、歴史、哲学、文学、人類学、美学、記号学をデザイン手法によって、この具現化目標を仮説し設定するということは、これまでのグラフィックデザインやエディトリアルデザインなどの対象領域をさらに拡大し、時代的かつ社会的なデザインそのものを根本的に変革するものと期待できる。特に、コミュニケーションデザインを集中的に革新するデザイン学そのものが再構築されることになるだろう。つまり、これまでのデザインそのものが再編されるためにも、文理学という背景を対象としたデザイン技法とデザイン手法が生まれる。

デザイン政経学

対象と目標は、グランドデザイン学の構築である。デザインの意味とその対象は、デザインの本質的な役割の中で、グランドデザインという呼称を生み出すまでになっている。しかし、グランドデザインの定義と本質とその効果は不明確であった。そこでこれまで総合的な政策学と呼ばれていた領域を、正確かつ詳細に検証する。この検証によって、「計画学」と「編集学」を基本としたデザイン手法の導入を計ることでグランドデザインを定義する。そして、この定義から、具体的には政治・経済・金融・財務・経営・行政から防衛に至るまでを学際化し、政策学デザインをめざす。それは、制度設計論の具現化手法となるデザイン学の創出にいたるものである。すなわち、デザインを中核とした総合政策学は、これからの社会づくりへのデザインとして運営維持手段を明確にするものとなる。政策学であり政経学を変革する新たな実務学である。